

平成30年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第5号（9月予報）

平成30年8月31日 秋田県病害虫防除所

【内容】 I. 予報の要点 II. 主要病害虫の向こう1か月の予報 III. 発生予報と防除対策 IV. 気象予報 V. 気象データ VI. 用語の説明	【問合せ先】 秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251
【お知らせ】 ◇今回の予報対象期間は9月を主とします。次回の発表予定は平成30年9月28日です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬があります。使用制限となる農薬の変更情報は秋田県のホームページで確認してください。 https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。 http://www.famic.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。 http://www.e-komachi.jp/	

I. 予報の要点

水 稲	斑点米カメムシ類の発生量は平年並と予想されます。必要に応じて出穂期24日頃頃に、畦畔を含めたほ場全体にキラップ剤を茎葉散布してください。
大 豆	マメシクイガの発生量は平年並と予想されます。必要に応じて9月上旬に、1～2回の防除をしてください。
野 菜	きゅうりでは、褐斑病の発生がやや多いと予想されますので、防除を実施してください。ねぎでは、さび病、黒斑病・葉枯病の発生が平年並と予想されますが、特に葉枯病は収穫物の品質低下の要因となるため、定期的な防除に努めてください。
果 樹	各樹種とも収穫期を迎えるため、薬剤防除を行う際は収穫前日数に注意してください。 りんごでは、黒星病とナミハダニの発生が多いと予想されます。黒星病は7月9日発行の注意報第1号を参照して防除を行ってください。ナミハダニの発生が多い園地では越冬態がみられる前に防除してください。 なしでは、黒星病の発生が多いと予想されます。発病部位を切除し適切に処分してください。 ぶどうでは、べと病の発生がやや多いと予想されます。発生の多い園地では銅剤を散布してください。

II. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期	発生量	
				現況	予報
水 稲	斑点米カメムシ類	全県	—	やや多い	平年並
	アカスジカスミカメ		—	平年並	やや少ない
	アカヒゲホソミドリカスミカメ		—	多い	平年並
大 豆	フタスジヒメハムシ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	マメシンクイガ	全県	—	少ない	平年並
ね ぎ (秋冬どり)	さび病	全県	—	やや少ない	平年並
	黒斑病・葉枯病	全県	—	やや少ない	平年並
	ネギアザミウマ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	ネギハモグリバエ	全県	—	少ない	少ない
	シロイチモジヨトウ	全県	—	—	平年並
きゅうり	黒星病	全県	—	平年並	平年並
	炭疽病	全県	—	少ない	やや少ない
	褐斑病	全県	—	平年並	やや多い
キャベツ	コナガ	全県	—	平年並	やや少ない
	モンシロチョウ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	ヨトウガ(第2世代)	全県	—	平年並	平年並
トマト	灰色かび病	全県	—	やや少ない	平年並
	葉かび病	全県	—	やや少ない	平年並
	コナジラミ類 (オンシツコナジラミ)	全県	—	少ない	少ない
りんご	斑点落葉病	全県	—	少ない	平年並
	黒星病	全県	—	多い	多い
	炭疽病	全県	—	やや少ない	平年並
	輪紋病	全県	—	平年並	やや多い
	褐斑病	全県	—	平年並	やや多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	—	やや多い	平年並
	ナミハダニ	全県	—	多い	多い
	リンゴハダニ	全県	—	平年並	平年並
	果樹カメムシ類 (クギカメシ、チャバネカメシ)	全県	—	やや少ない	平年並
な し (日本なし)	黒星病(秋型病斑)	県北部・県中央部	—	多い	多い
	黒斑病	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	輪紋病	県北部・県中央部	平年並	平年並	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	少ない	やや少ない
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	多い	やや多い
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
	果樹カメムシ類 (クギカメシ、チャバネカメシ)	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
ぶどう	べと病	県南部	—	平年並	やや多い
	晩腐病	県南部	—	平年並	平年並

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稻

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ)	—	平年並 (前年より少ない)
(アカヒゲホソミドリカスミカメ)	—	やや少ない (前年より少ない)
	—	平年並 (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、8月4～5半旬の抽出ほ場調査における斑点米カメムシ類の水田内すくい取り数は1.3頭 (平年1.0頭) でやや多く、発生地点率は26.3% (平年22.0%) で平年並であった (/+)。そのうちアカスジカスミカメは0.8頭 (平年0.9頭)、発生地点率は16.3% (平年18.1%) でいずれも平年並であった (/±)。アカヒゲホソミドリカスミカメは0.5頭 (平年0.1頭) で多く、発生地点率は11.3% (平年5.1%) で高かった (/+)。

ウ、8月1～5半旬の予察灯における誘殺数は、アカスジカスミカメが5.2頭 (平年14.2頭)、アカヒゲホソミドリカスミカメが16.2頭 (平年26.8頭) でいずれもやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、1回目の防除が適期に行われなかったほ場、水田内雑草があるほ場、牧草地や休耕田等に隣接しているほ場、現在水田内に斑点米カメムシ類の発生が認められるほ場等では、出穂期24日後頃に畦畔を含めたほ場全体にキラップ剤 (使用時期は収穫14日前まで) の茎葉散布剤を散布する。

イ、農薬を散布する際には養蜂業者等との連携をとり、みつばち等への危害防止を徹底する。

ウ、法面や休耕田等の雑草地の草刈りは、稲の収穫2週間前以降に行う。

B 大豆

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. フタスジヒメハムシ	—	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、8月5半旬の巡回調査における株当たり成虫数は0.0頭 (平年0.3頭) でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発ほ場ではアグロスリン乳剤等で防除する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. マメシンクイガ	—	平年並 (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、前年の子実調査における被害粒率が高かったことから、越冬量が多いと推定される (/+)。

イ、8月5半旬の巡回調査における成虫の叩き出し数は0.2頭（平年1.3頭）で少なく、発生地点率は12.5%（平年31.0%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、連作ほ場では密度が高まるので、次のいずれかで防除する。

- ① 8月末に防除を行っていない場合はアグロスリン乳剤、アディオン乳剤、パーマチオン水和剤を9月上旬に1回散布する。
- ② エルサン乳剤、サイアノックス剤、スミチオン乳剤、トレボン剤、プレバソンフロアブル5は9月上旬に1～2回散布する。なお、前年多発したほ場では2回散布とする。
- ③ 無人ヘリで防除する場合はスミチオン乳剤、トレボンスカイMC、プレバソンフロアブル5を9月上旬に2回散布する。ただし、トレボン剤、プレバソンフロアブル5の総使用回数に注意する。

イ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

C ねぎ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. さび病	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は1.1%（平年4.2%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので発病前の防除に努める。発病が見られる場合は、直ちにアミスター20フロアブル、オンリーワンフロアブル等を散布する。アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる薬害を生じる場合があるので、散布間隔を2週間以上とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病・葉枯病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は4.9%（平年7.9%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、降雨が続くと発病しやすいので予防や発病初期の防除に努める。

イ、肥料切れや生育後期など草勢が衰えてくると多発するので注意する。

ウ、べと病やさび病の病斑跡や害虫の食害痕に二次的に感染する場合があるので防除に努める。

エ、本県における秋季の発生は葉枯病が主である。葉枯病が原因となる黄色斑紋病斑は収穫物の品質低下の要因となるため、アミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤を組み合わせ、9月上旬～10月上旬に約10日間隔で散布する。アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる薬害を生じる場合があるので、散布間隔を2週間以上とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	—	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている (/±)。
 イ、8月4半旬の巡回調査における被害株率は23.1% (平年39.6%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発生が多いほ場が隣接している場合は、多発に注意する。
 イ、発生密度の低減を図るために、7～10日間隔でアルバリン/スタークル顆粒水溶剤、スピノエース顆粒水和剤、ダントツ水溶剤、ディアナSC等を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ネギハモグリバエ	—	少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている (/±)。
 イ、8月4半旬の巡回調査における被害株率は5.8% (平年30.9%) で低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ネギアザミウマに準ずる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. シロイチモジヨトウ	—	平年並 (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている (/±)。
 イ、8月4半旬の巡回調査における食害株率は0.5%であった。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期からアグロスリン乳剤、アタブロン乳剤、アディオ
ン乳剤、カスケード乳剤、ゼンターリ顆粒水和剤、ノーモルト乳剤等を散布する。

D きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている (/±)。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は1.0%（平年3.3%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、冷涼多湿条件で発病が多くなるため、山間高冷地では予防に努める。

イ、発病前から定期的にジマンダイセン水和剤、ダコニール1000等を散布する。発病が見られる場合は、整枝・摘葉を適切に行い、速やかにスコア顆粒水和剤、トップジンM水和剤等を散布する。

ウ、翌年の発病を防ぐため、栽培終了後の株はほ場で処分し、支柱等の各種農業資材はケミクロンG等で消毒する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 炭疽病	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は2.4%（平年12.4%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場で処分する。

イ、発病前からの薬剤散布に努める。発病が見られる場合は、アミスター20フロアブル、ゲッター水和剤等の治療効果がある薬剤を散布する。また、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くする。

ウ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

エ、ベンゾイミダゾール系剤、QoI剤（ストロビルリン系剤）は耐性菌出現回避のため連用を避ける。

オ、翌年の発病を防ぐため、栽培終了後の株はほ場で処分し、支柱等の各種農業資材はケミクロンG等で消毒する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. 褐斑病	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は18.8%（平年20.5%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉は早めに取り除き、ほ場で処分する。

イ、発病前からシトラノフロアブル、ジマンダイセン水和剤、セイビアーフロアブル20、ダコニール1000等を散布する。発病が見られる場合は、スミブレンド水和剤等の治療効果がある薬剤を散布する。

ウ、チオファネートメチル剤、ジエトフェンカルブ剤、ボスカリド剤、アゾキシストロビン剤では耐性菌が確認されているため、散布しても効果が低い場合は異なる系統の薬剤を選択する。

エ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くする。

オ、翌年の発病を防ぐため、栽培終了後の株はほ場で処分し、支柱等の各種農業資材はケミクロンG等で消毒する。

E キャベツ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. コナガ	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
- イ、秋田市予察ほにおける8月2～5半旬のフェロモントラップの誘殺数は1.0頭（平年7.0頭）でやや少なかった（ /-）。
- ウ、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.07頭（平年0.07頭）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発生初期で幼虫の密度が低いときは、遅効性で残効が長い昆虫成長制御剤（IGR剤）又はBT剤を散布する。
- イ、発生が多くなってきたら、ネライストキシン系剤、アフーム乳剤、コテツフロアブル、スピノエース顆粒水和剤、ディアナSC、トルネードエースDF、フェニックス顆粒水和剤、プレバソフロアブル5等を散布する。なお、フェニックス顆粒水和剤及びプレバソフロアブル5は2週間程度の残効があるため、防除回数を減らすことができる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. モンシロチョウ	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
- イ、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0.03頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、コナガとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ヨトウガ（第2世代）	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、初夏どりキャベツにおける第1世代幼虫の発生量は平年並であった（ /±）。
- イ、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0.02頭）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、若齢幼虫のうちに防除する。

4. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
黒腐病	—	平年並	平年並	防除を要するほ場は少ないと見込まれる。
ハスモンヨトウ	—	平年並	平年並	他害虫との同時防除を行う。
アブラムシ類 (モモアブラムシ)	—	平年並	平年並	防除を要するほ場は少ないと見込まれる。

F トマト

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 灰色かび病	—	平年並（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病株率は16.2%（平年27.6%）、発病度は4.0（平年7.3）でいずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。

イ、発病部位は早期に除去し、ほ場外で処分する。

ウ、発病前からの薬剤散布に努める。発病を確認した場合は、ゲッター水和剤、スミブレンド水和剤等の治療効果のある薬剤を散布する。

エ、ベンゾイミダゾール系剤、ジカルボキシイミド系剤の耐性菌が確認されているため、薬剤の選択に注意する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 葉かび病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病株率は23.3%（平年34.2%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、過度のかん水を避け、多湿にならないようにする。

イ、肥料切れを避ける。

ウ、潜伏期間が約2週間あり、発病が目立ってから防除では手遅れになるので予防散布に努める。発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、トリフミン水和剤等の治療効果のある薬剤を葉裏にもかかるように散布する。

エ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. コナジラミ類 (オンシツコナジラミ)	—	少ない (—)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている (/±)。
 イ、北秋田市予察ほにおける8月下旬の発生株率は2.0% (平年25.0%) で低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ハウス内外の除草を行う。
 イ、摘葉後は、残さを早期に処分する。
 ウ、多発すると防除効果が劣るので、発生初期からアディオオン乳剤、アドマイヤー水和剤、ノーモルト乳剤、モスピラン顆粒水溶剤等を散布する。

G りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 斑点落葉病	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。
 イ、8月中～下旬の巡回調査における発病葉率は1.6% (平年2.9%) で低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
 イ、9月中旬以降も高温・多雨の多発条件が予想される場合は、9月中旬にも薬剤を散布する。
 ウ、Q o I 剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒星病	—	多い (—)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。
 イ、8月中～下旬の巡回調査における発病新梢率は5.1%で前月より高まり、指導機関への被害葉等の持ち込みが増加している (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、7月9日発行の注意報第1号を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 炭疽病	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中～下旬の巡回調査における発病果率は0%（平年0.01%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、日焼け果は発病しやすいため摘果する。

イ、二次感染防止のため発病果は直ちに摘み取り、土中に埋める。

ウ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

エ、9月中旬以降に降雨が続くと予想される場合は、9月中旬にも薬剤を散布する。

オ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. 輪紋病	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6～7月の降水量は平年並～多く、感染量は多かったと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、気温が高いと発病が助長される傾向がある。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

ウ、9月中旬以降に気温が高く降雨が続くと予想される場合は、9月中旬にも薬剤を散布する。

エ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5. 褐斑病	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中～下旬の巡回調査における発病新梢率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、現在、葉での発病が確認され、かつ9月中旬以降に降雨が続くと予想される場合は、9月中旬にも薬剤を散布する。

ウ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
6. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、8月中～下旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0.03%）でやや少なかった（ /-）。

ウ、防除適期決定ほ（4か所）における8月1～4半旬のモモシクイガフェロモントラップへの総誘殺数は216頭（平年164頭）でやや多かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、被害果は見つけ次第直ちに摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫の飛来が多く、夜温が産卵条件（20～22時の気温が18℃以上）を満たす日が続く場合はネオニコチノイド剤等を散布する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
7. ナミハダニ	—	多い（前年並）

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、8月中～下旬の巡回調査における発生量は、一部の園地で寄生密度が高かったため、1葉当たりの成幼虫数は3.70頭（平年0.25頭）で多く、発生地点率は54.6%（平年37.7%）でやや高かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では、越冬態が見られる前にオマイト水和剤、コロマイト乳剤等を散布する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同一系統又は作用点在同一の剤は年間1回の使用とし、効力低下を防止する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
8. リンゴハダニ	—	平年並（前年よりやや多い）

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、8月中～下旬の巡回調査における1葉当たりの成幼虫数は0.01頭（平年0.09頭）、発生地点率は9.1%（平年13.7%）でいずれも平年並であった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では防除する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同一系統又は作用点在同一の剤は年間1回の使用とし、効力低下を防止する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
9. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、チャバネカメムシ)	—	平年並（前年より少ない）

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、8月中～下旬の巡回調査における被害果率は0.1%（平年0.1%）で平年並であった（ /±）。
 ウ、防除適期決定ほ（2か所）における8月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の総誘殺数は5頭（平年28頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は園地によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部や林地に隣接する園地では特に注意する。
- イ、園内への飛来が多い場合は、ネオニコチノイド剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。
- ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

H なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病（秋型病斑）	—	多い（-）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、8月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は0.3%（平年0.1%）、発病果そう葉率は0.9%（平年0.1%）でいずれも高かった（ /+）。
- ウ、8月中旬の巡回調査における発病果率は2.9%（平年0.8%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病部位は直ちに切除し、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
- イ、8月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は15.0%（平年18.0%）、発病果率は0.1%（平年1.4%）でいずれも平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、徒長枝及び発病が見られる枝は切除し、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 輪紋病	平年並（-）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ ±/ ）。
- イ、8月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し、適切に処分する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	やや少ない(前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている(/±)。

イ、県内4か所の防除適期決定ほにおける8月1～4半旬のモモシンクイガフェロモントラップの総誘殺数は168頭(平年318頭)で少なかった(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は見つけ次第直ちに摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、放任園の周辺など発生の多い園地や夜温の高い日が続いた場合は産卵が遅くまで続くため、産卵が見られた場合は、ネオニコチノイド剤を散布する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5. ナミハダニ	—	やや多い(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている(/±)。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たり成幼虫数は0.23頭(平年0.07頭)で多く、発生地点率は18.2%(平年27.7%)で平年並であった(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では、越冬態が見られる前に防除する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同一系統又は作用点が同一の剤は年間1回の使用とし、効力低下を防止する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
6. リンゴハダニ	—	やや少ない(前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている(/±)。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たり成幼虫数は0頭(平年0.004頭)でやや少なく、発生地点率は0%(平年8.4%)でやや低かった(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では防除する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同一系統又

は作用点が同一の剤は年間1回の使用とし、効力低下を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、チャバネオカメムシ)	—	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、県内4か所の防除適期決定ほにおける8月1～4半旬のチャバネオカメムシフェロモントラップのカメムシ類の誘殺数は12頭 (平年26頭) でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は園地によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部や林地に隣接する園地では特に注意する。

イ、園内への飛来が多い場合は、ネオニコチノイド剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

I ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. ベと病	—	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ、8月中旬の巡回調査における発病葉率は0.63% (平年0.40%) で平年並であった (/±)。

ウ、8月中旬の巡回調査における巨峰の発病果房率は0% (平年0%) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、欧州系品種の他、巨峰などの大粒種、スチューベンで発生が多くなりやすい。

イ、発生が多い園地では、銅剤を散布する。

ウ、翌年の伝染源となる落葉は、土中に埋めるなど適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 晩腐病	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、8月中旬の巡回調査における巨峰の発病果房率は0% (平年0.07%) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した果粒は摘み取り、適切に処分する。

イ、翌年の伝染源となる巻きひげや枝に残っている穂梗の基部は切除後、土中に埋めるなど適切に処分する。

IV. 気象予報

平成30年8月30日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（9月1日～9月30日）

（1）予想される向こう1か月の天候

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、東北日本海側で高い確率50%、東北太平洋側で平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並の確率50%です。

（2）向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

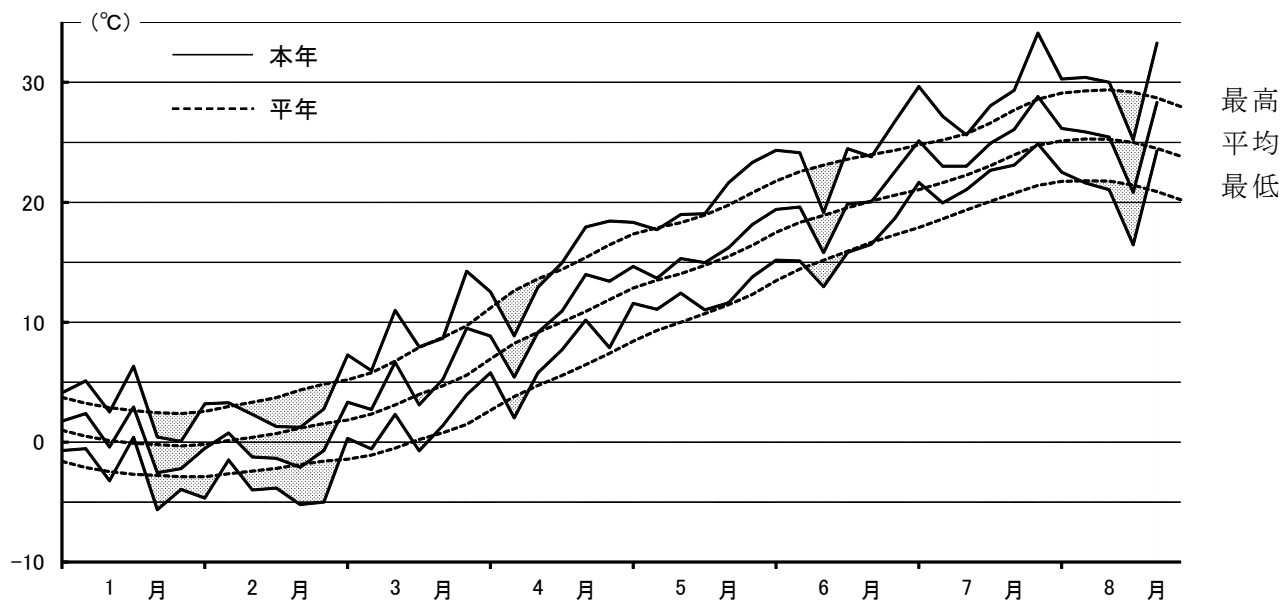
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	30%	30%	40%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	40%	20%

（3）気温経過の各階級の確率

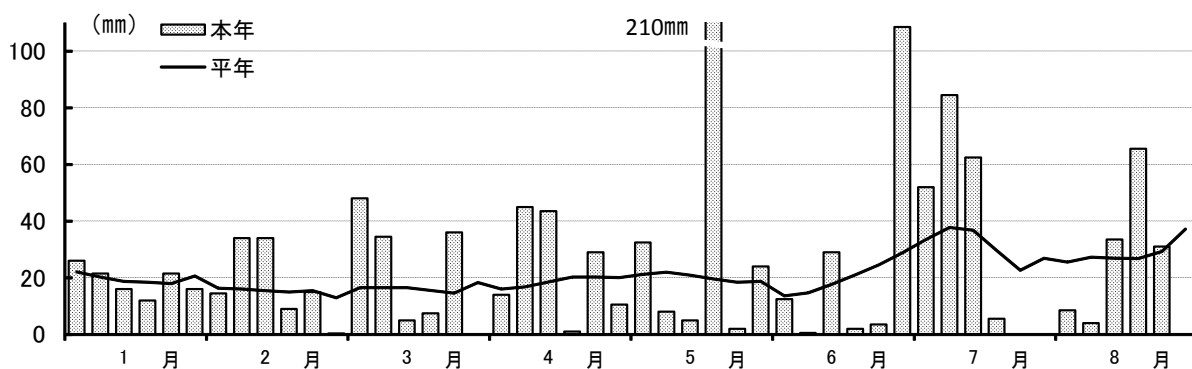
	低い	平年並	高い
9/1～9/7	20%	30%	50%
9/8～9/14	30%	50%	20%
9/15～9/28	40%	30%	30%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～8月5半旬)

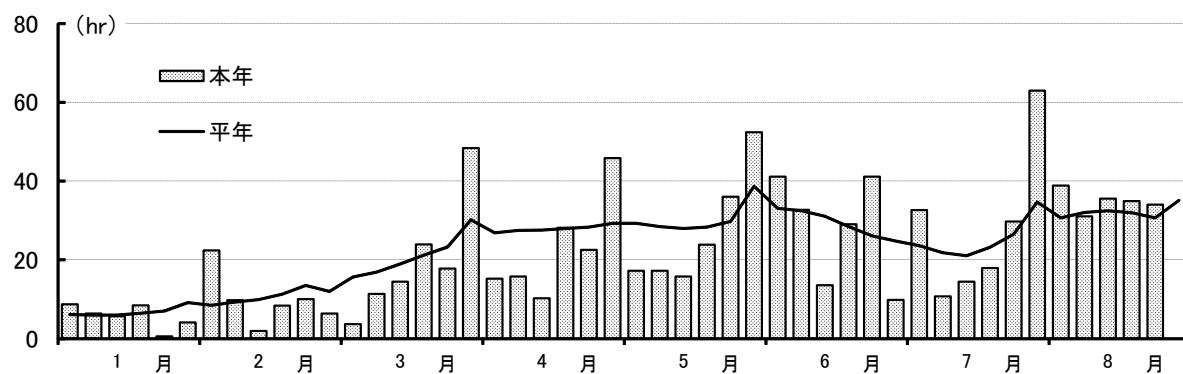
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

平年値 ↓						
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解 説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○安全使用の基本事項

- ・農薬の使用基準を遵守する。
- ・病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・防除履歴を必ず記録する。

○農薬使用上の注意

- ・農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
- ・家畜・養蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の家畜及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
- ・農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・農薬散布時の装備と体調は万全にする。

○農薬の取扱い上の注意

- ・農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・農薬を他の容器（清涼飲料水の容器等）へ移し替えない。